

被災地は電気、水道、通信などのライフラインが寸断されている。そこで被災地特有の状況として、①情報の入手が難しい②ストレスや氷点下の寒さが身体や健康状態に悪影響を与えている③住宅や病院、商店などが被災し避難所や仮設住宅で不便な生活を送っている高齢者が多いことなどが考えられる。このような状況を踏まえたうえで、私に何ができるかを考えたい。

私は、まず相手側の話を直接に十分に聴くことからボランティア活動を始めるべきだと考える。インターネットや新聞、テレビで得られる情報には限界があるからだ。直接に話せば、相手が抱えている不安や悩みがつかめる。この作業を怠れば、不要なものを提供したり、人手の過不足が生じたりするなどボランティアをする側と受ける側のミスマッチが起こってしまう。

また、相手の話を十分に聞く場合でも、「カウンセリングマインド」を持っていることが大切だ。カウンセリングマインドとは、話の聞き手に徹し鏡の役割をすることで、相手自身に不安や悩みの本質に気づかせるという考え方だ。もちろん、これによって具体的に何か解決するわけではないが、ボランティアと相手との信頼関係が深まるし、不安や悩みの解消に向けて適切なアプローチが可能になる。このように話を直接十分に聴くことも被災地での重要な活動のひとつと考える。

相手の実情を把握したら、現場のスタッフと協力して身の周りの世話をする。ただ、被災地の状況を考えると、家族や親戚、友人を亡くした高齢者も多いはずだ。介護活動のサポートに加えて、畑作りや手芸などの作業を採り入れて悲しみを紛らわすように工夫したい。また、長年暮らしてきた土地を離れ、孤独や絶望を感じている高齢者も多いだろう。そのような人に対しては、これまで縁のあった人や思い出の地を巡るような外出を企画したい。また、亡くした家族の遺品の整理やお墓参りの付き添いなども手伝えることができる。

被災地でボランティア活動をするには、普通の活動以上に相手への配慮や気遣いが大切だと私は思う。そして、そのような視点から浮かんだアイデアや企画は「難しいことでもするぞ」という心構えが必要だと考える。